

●発行 1989年9月30日
 ●発行所 劇場芸術国際組織日本センター
 〒153東京都目黒区大橋2-16-24-303
 Room 303, 2-16-24, Ohashi, Meguro
 -ku, TOKYO, 153
 Tel.03(468)4983 Fax.03(468)5396
 郵便振替：東京6-398099
 ●発行人 立木定彦 Sadahiko TACHIKI
 ●印刷 光陽印刷株式会社
 ●定価 ¥500(本体価格¥486)

R A T

劇場芸術

REVIEW OF
ART IN THE
THEATRE

Japanese Centre of Organisation Internationale des Scénographes, Techniciens et Architectes de Théâtre
 Japanese Centre of Association Internationale des Critiques de Théâtre

CONTENTS

●発行団体 Publisher
 劇場芸術国際組織日本センター JOISTAT
 国際演劇評論家協会日本センター AICTJ

●OISTAT日本センター加盟団体
 Cooperative organization
 日本舞台テレビ美術家協会 JASTA
 日本照明家協会 LEAJ
 日本劇場技術協会 JITT
 日本演劇音響効果家協会 JTSA
 舞台監督協会 JSMA

●編集 Editor
 立木定彦 Sadahiko TACHIKI

●編集スタッフ Editorial staff
 伊東正示 Masaji ITO
 田才益男 Masuo TASAI
 田之倉 隼 Minoru TANOKURA

●ニュース編集 News editor
 田之倉 隼/田才益男

●英文編集 English summary
 スー・ハーバート Sue HERBERT

●レイアウト Layout
 アトリエ ZEN Atelier ZEN
 近藤和子(表紙) Kazuko KONDO

●協力 Supporting members
 (株)劇場工学研究所
 (株)シアターワークショップ
 (株)シアターデザイン

●本号協力 Special Thanks
 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館
 Richard Wagner Festspiele, Bayreuth
 東急文化村準備室
 東急建設株式会社
 石本建築事務所
 MIDI 総合設計事務所
 モレキュラーシアター
 (株)シアターデザイン
 (財)版急学園・池田文庫

クプファー演出の演劇性を評価する／二年目を迎えた〈指輪〉をみる——木下健一 Richard Wagner Festspiele '89	4 Kenichi KINOSHITA
東急が目指す渋谷文化路線／その計画と運用——山崎泰孝 BUNKAMURA Theatre Complex in Shibuya	24 Yasutaka YAMAZAKI
パフォーマンスと劇場建築／OISTATシドニー舞台美術委員会——石井みつる OISTAT Sydney Scenographer Commission	9 Mitsuru ISHII
ドブリシ城での三日間／OISTATチェコスロバキア執行委員会——高田一郎 OISTAT Dobris Exective Committee	12 Ichiro TAKADA
80年代の利賀フェスティバル／演劇の国際的交流の場を創る——斉藤郁子 Towards More International Theatre, Toga Festival '89	14 Ikuko ASAKURA
80年代の朝倉摂の仕事——野村 喬 Setsu ASAKURA's Stage Work for the Eighties	16 Takashi NOMURA
OISTAT JAPAN NEWS[No.40]	20
AICT会報[No.11]	22
Book Review/"THEATRE TECHNOLOGY" by George C.IZENOUR	23
カフカと場所性／カフカ国際演劇祭の報告——豊島重之 Kafka Festivals in HACHINOHE & PURAGUE	24 Shigeyuki TOSIMA
the Orchard Hall／オーチャードホールの設計計画——三上祐三 Contemporary Technology for Theatre 6	18 Yuzo MIKAMI
Nakamura-za Theatre／まないた版の中村座——田辺健雄 Japanese Traditional Theatres in 19th Century 6	2 Takeo TANABE
池田文庫——栗原小巻 Theatre Museums of the World 6	32 Komaki KURIHARA
表紙：朝倉 隼=銀座セゾン劇場「マクベス」(解説18頁参照) Cover. Design for the Scene from MACHBETH	1 by Setsu ASAKURA

〈支持会員連名〉 Sustaining members

アールディエス株式会社／(株)エレクトロボイス・アルテック営業部／石川島播磨重工業株式会社／(株)カヤバ・レイステージ
 三精輸送機株式会社／(株)サンケン・エンジニアリング／日本コーバン株式会社／(株)東京舞台照明／(株)東芝
 (株)バリライト・アジア／不二音響株式会社／三菱重工業株式会社／松下電工株式会社／株式会社松村製作所／丸茂電機株式会社
 森平舞台機構株式会社／(株)レーザー・メディア／ヤマハサウンドテック株式会社／株式会社東芝ライテック (順不同)

〈広告目次〉 PR Pages

三精輸送機株式会社…2 森平舞台機構株式会社…17 アールディエス株式会社…19 株式会社リプロポート…21
 株式会社テアトロ…22 株式会社東光堂…23 株式会社カヤバ・レイステージ…32

「プラハ国際カフカ演劇祭'89」報告 カフカと場所性

豊島重之

Sigeyuki TOSIMA

発端は三月、八戸で開かれた「国際カフカ・フェスティバル」である。プラハとベルリンを往還したカフカの手紙によるモレキュラーシアターの演劇「f/Fパラサイト」を核に、全作カフカに基づく演劇・音楽・映画、そして演出家フィリップ・アドリアンや哲学者イヴリン・ベックら内外のカフカ研究者を多数招いてのカフカ・コロキウムが反響をよんだ。しかし最も待望されたカフカの地元チェコからのゲスト、演出家アルノスト・ゴルトフラムと劇場主催リュボミール・シュミットマイヤーの両氏が、カフカの名が障壁となって来日できなかったのだ。

プラハでのカフカ演劇の実現

1968年、「プラハの春」へのソ連軍の介入、カフカ劇を上演した文化人の逮捕以来、チェコではカフカは禁書同然、この二十年間出版や上演は勿論、若者達はカフカの名さえ知らない有様だという。そこへ八戸の動きを知った両氏が中心となって、当局に働きかけ、ついに5月18日から十日間、「カフカ演劇祭89」実現にこぎつけたのだ。

しかもこの記念すべきカフカ復活の催しに、今度は逆にモレキュラー一行が招待されたのである。八戸では会えなかった両氏にプラハで会える、カフカ固有の演劇性のありかをたどってみたい、二年前のベルリン上演に続くプラハ上演で“書簡の演劇化から演劇の書簡化へ”という構想が具体化する。この三つの想いが一行16名を、はるかボヘミアの森へと駆りたてたのであった。

カフカの生家の場所性

市の心臓部、時計塔の真裏にあるカフカの生家から三方に通りがひろがる。右手がドイツ人街、左がチェコ人街、正面がユダヤ人街である。チェコに住み、ドイツ語で話し、しかもユダヤ人であり続けたカフカ。三方にひきさかれたアイデンティティ、一触即発のポリフォニー、それを耐えるには書くことの他に道はない。偶然というには余りにできすぎた地理的符合。生家の壁の肖像レリーフを見あげると、その鋭い眼光はいまも三つの通りを同時に見おろしているかのような。そして市内を二分して流れるブルタヴァ。毎晩のようにカフカは勤務を終えると、川を渡ってプラハ城へ、その迷宮の一室

で言葉を研ぎ、あるいは筆を折り、夜明けにまた川をこえて自宅に戻ったという。我々もまた同じ道筋を歩きまわりながら、ブルタヴァとはカフカにとって、書くことの此岸と彼岸が激しく切り結ぶ“書くことの断層”だったのではないか、という想いを深くした。

たえず書くことを生み出す場所と、それを宙吊りに追いこむ場所。カフカの作品に遍在する演劇性をこの二つの場所にかぎとることができたのは、語る演劇ならぬ書く演劇「f/F」にとって大きな収穫といえる。

実験演劇の拠点「ジュニアクラブ劇場」

期間中、カフカ美術展とカフカ会議も併催された演劇祭会場は、カフカの生家



**Kafka International
Festivals
From Hachinohe to Prague**
by Shigeyuki TOSHIMA

In March, 1989, an International Kafka Festival was held in Hachinohe, a city in the extreme northern part of Japan. It was centred on Molecular Theatres production <f/F Parasite>, and Philippe Adrien, the director, and Evelyn Beck, the philosopher, were invited to attend. Arnost Goldflam and Lubomir Schmidtmaier, both from Czechoslovakia, were also invited but were unable to come to Japan.

Messre Goldflam and Schmidtmaier were no doubt busy with the preparations for the Kafka Drama Festival '89, which was held in Prague for ten days from 18 May, and in which 16 members of Molecular Theater were able to participate. A Kafka art exhibit and a conference on Kafka's work were arranged to coincide with the festival. In all, performances of seven Kafka plays were staged at the Junior Klub theatre by various theatre groups including one from Poland and the Soviet Union, to audiences totalling 6,000 people.

Molecular theater gave four performances of <f/F>, and Kazue OKUBO's rendition of Kafka was well received.

からトラムで20分、国際交流も盛んな実験演劇の拠点「ジュニアクラブ劇場」。

シュミットマイヤー氏を軸にスタッフも充実し、若い世代や「春」以来の文化人の信望も厚い。特に今回、ポーランドやソ連、日本そしてスロバキアからも劇団を招待し、七本のカフカ劇を昼夜20ステージ上演という強行軍、しかも連日超満員で延べ六千人もの市民が結集した事実はそれを物語っている。

何よりも演劇がカフカ復活の起爆剤となったこと、現にこれを機にカフカ出版の動きが出てきたという。確かにプラハの文化が演劇中心だとは言え、これほどの浸透力は日本では到底考えられない。まさにそれは、当局主導のペレストロイカではなくあくまで市民レベルの真の渴望が、二十年ぶりのカフカに噴流したことを明示している。その好例が学生劇団ジェロによる「ヨゼフィーネ」だ。市民に内在する渴望が結局は権力を虚構してしまう悲慘をスラブスティックに描きながら、真の渴望のありかを問う熱演だった。同じ「変身」に挑んでもジェロはテアトル77に比べて、粗削りだが実に明るくパワフルだ。チェコとスロバキアの両劇団による「アメリカ」競演も、欧米風ミュージカル演出と社会主義リアリズム風演出という好対照をみせた。

一方、我々の「f/F」の四ステージは千人をこえる満場の驚嘆をさらった。手紙の内容ではなく手紙自体の機能が、物語ではなく運動がそこでは劇化されていたからだ。加えてカフカ役の大久保一恵のたたずまいも高い評価を浴びていた。

対極的なカフカ解説の姿勢をめぐって

コロキウムでの最大の争点は、ブルノ一市のハー・シアターによる「審判」と「f/F」における、対極的なカフカ解説の姿勢をめぐってであった。「審判」では、俳優達は退場したあとも常に舞台の陰から主人公の一挙一動を監視・観察している。このゴルトフラム演出はカフカ独特の構造を抽出する一方、解釈はできる限



2

り抑制して原作を重厚に再現したものだ。片や「f/F」は、書くことへの寄生という掘りあてた構造こそ違え、構造の呈示という点では「審判」と通脈しながら、確かに解釈過剰と受けとれる面がある。言うまでもなくこの差異は解釈の度合いにとどまらず、両者の存立する場所性に帰趨する。

カフカの生きた状況といまなおそのまま重なりあうプラハの現在と、ポストモダンや高度情報化の波をもちにかぶる八戸の現在。前述した二つの書くことの場所性にひきよせて言えば、「審判」は場所

性への自己限定を、「f/F」は場所性からの逆説的離陸をモメントに演劇を駆動させているのだ。こうした拮抗的な差異がきわだつ空間にこそ、プラハと八戸の両演劇祭がはじめて遭遇することができよう。

モレキュラー一行は帰国後の7月、プラハから演劇評論家オンドリエイ・フラーブ氏を八戸に招いて、プラハの印象を舞台化した新作を上演した。八戸とプラハの運動は今、途についたばかりだ。場所の交響が織りなす非場所の感覚、即ち出来事に向けて。



Ralf EMMERICH

3

1 八戸のカフカ・コロキウム

左より司会の豊島重之・4人目バリの演出家フィリップ・アドリアン・5人目NYの哲学者シルヴェール・ロトランジェ・NYの映像作家クリスクラウス

2 プラハのカフカ・コロキウム

左端・演劇祭ディレクターのリュボミール・シュミットマイヤー・左から3人目演出家アルノスト・ゴルトフラム氏・中央豊島重之他

3 「プラハ・カフカ演劇祭」で上演されたモレキュラー「f/Fパラサイト」のステージ中央・カフカ役の大久保一恵、フェリツェ役の高沢利栄

豊島重之(としま しげゆき)

1946年八戸市に生まれる。'71年東北大学医学部を卒業、精神科医。'83年パリ公演の後、東北演劇祭を主催し、青森県芸術奨励賞を受賞。その後'87年ベルギー、ベルリン、ミュンスター公演を皮切りに、国内、国外を問わず精力的に公演活動を行っている。モレキュラーシアター主宰。